

## 「正信偈」について（第一回）

正信偈の教え上 古田和弘、正信偈のこころ限りなきいのちの詩 戸次公正、等による  
きみようむりようじゆによらい

帰命無量壽如来

無量壽如来に帰命し、

なむふかしぎこう

南無不可思議光

不可思議光に南無したてまつる。

### 「意識」

みほとけ

永遠の 仏よ あなたの呼び声に私は目覚め

はか量りしれない壽いのちに立ち帰り

思い うやまはかれない光に敬いを捧げます

親鸞聖人は、『教行信証』に「正信偈」を掲げられるに先だって、

先ず「正信偈」をお作りになったそのお気持ちだいしよくを、「しかれば大聖の

真言だいそに帰し、大祖げしやくの解釈ぶつとんに閲して、仏恩じんの深遠なるを信知して、正信  
念仏偈を作りて曰く」と述べておられます。

「大聖の真言に帰し」とあるのは、釈尊が説かれた真のお言葉を依り処とする、ということお経です。釈尊は、『仏説無量壽経』というお経をお説きになりました。そしてこのお経のなかで、阿弥陀如来がすべての人を救いたいと願われた、いわゆる弥陀の本願のことをおしえられたのです。それが大聖の真言、つまり釈尊の真のお言葉ということなのです。親鸞聖人は、「正信偈」を作るにあたって、この『仏説無量壽経』の教えを依り処とされたというわけです。

次の「大祖げしやくの解釈げしやくに閲して」というのは、印度・中国・日本の三国に出られた七人の高僧が、『仏説無量壽経』の教えを正しく受けとめられた、その解釈を手がかりにする、ということお経です。親鸞聖人は、『仏説無量壽経』についてのご自分の見解を主張しようとされたのではなく、三国の七高僧のご教示を仰がれたのです。

親鸞聖人は、ご自身を見つめるのに大変厳しい眼をおもちでありま

した。ご自身を、愚かで罪深い凡夫であると見究めておられたのです。実は、そのような凡夫を何としても助けたいというのが、『仏説無量寿経』に説き示されている阿弥陀如来の本願なのです。親鸞聖人は、このような『仏説無量寿経』の教えを依り処とし、また、このお経の教えについての先輩がたのご解釈によって、釈尊と阿弥陀仏の恩徳がまことに深いことを信じさせてもらったことを喜んでおられるのです。そのことを「仏恩の深遠なるを信知して」といっておられるのです。そして、自ら信ずるとともに、人にも教えて物の恩の深いことを信じさせるために、「正信偈」をお作りになったのです。

『帰命』 南無というは帰命なり、またこれ発願回向の義なり。阿弥陀仏と言うはその行なり。(御文五十三) (帰命とは、仏が誓いを立てて、それを回らし、さしむけるという意味です。その願いの行を阿弥陀仏というのです)

『南無』 南無はサンスクリット語のナモ・ナマスを漢字で音写して原音の響きを伝え様とするもの。たとえばインドを印度と音写する様なもの。南無は、「私は帰依します。敬いを捧げます」という意味です。蓮如は「たのむ」と説明しますがそれは当てにしたり、依頼するということではなく、自分の心を投げ出しておまかせするという意味なのです。

『無量寿如来』 阿弥陀仏のことです。サンスクリット語のアミターユスを音写して阿弥陀といい、その意味は無量寿いのち量り知れない寿、はてしないのちである一如の世界(色も形もないけれど、たしかにある世界)から現われ、私たちの現実みほとけにまでやって来た人なので「如来」というのです。それは永遠の仏という意味でもあります。

『不可思議光』 人間の思慮・分別では計ることのできない光のことです。あれこれと迷っている私たちの心の闇が晴れた時に、目の前がパツと明るくなるような光です。だから迷うことも大事です。問題は何に迷っているかに気付くことです。